

## 幸田露伴「五重塔」と読者としての政事家たち

—新聞『国会』とシカゴ万博—

馬場 美佳

稿者はこれまでに、幸田露伴の小説「五重塔」（明治二四年一月七日～翌二五年四月一九日）が、明治二四年一〇月二八日に発生した濃尾大地震の震災報道期に新聞『国会』へ連載された小説であることに注目した<sup>1</sup>。本稿では、同時期に、やはり国家的な規模で話題となり、震災報道中も同じ紙面に報じられていた、シカゴ万国博覧会記事との関連において、新聞連載小説である本作の特性を重視し、即時的解釈の可能性を検討するものである。

## 一、新聞読者としての政事家と（真に美術国裏に住せる人）

「五重塔」は、棟梁・源太の帰りを待つ妻・お吉が留守居する姿にはじまる。

「木理美しき楓桐、縁にはわざと赤檜を用ひたる岩畳造りの長火鉢に對ひて話し敵もなく唯一人、少しは淋しさうに坐り居る三十前後の女」「何心なくいたづらに黒文字を舌端で嬲り躍らせ」「銀ほど光れる長五徳を磨き、おとしを拭き、銅壺の蓋まで奇麗にして」「南部叢地の大鉄瓶を正然とかけ」「寄木細工の小繊麗なる煙草箱を右の手に持った鼈甲管の煙管で引き寄せ」（其一）

というように、塔建立の件で上人に呼び出された夫を心配し、落ち着かない風情ではあるものの、お吉の性情を一連の動作の中に現れる上質な品々によって演出しており、彼女の瀟洒な佇まいが感受できる場面になっている。いわゆる工芸品づくしとも呼べそうな手法で描かれたこの冒頭には、重厚な「長火鉢」や高級爪楊枝である「黒文字」、やはり高級素材である鼈甲を管に用いた「煙管」に加え、地域の特産である南部鉄瓶や箱根の寄木細工も列挙されており、果たして露伴は、「五重塔」にどのような世界観を与えようとしたのだろうか。

職人という存在に、露伴が強い関心を抱いていたことは知られる。それゆえに露伴研究史の文脈において見れば、この冒頭はまさしく露伴好みということになるだろう。たとえば第三回内国勸業博覧会（明治二十三年四月―七月開催）への露伴の関心のありように注目して、藤井淑禎は、「在野の「良工」の艱難辛苦に肩入れを惜しまない露伴は、確実に、形・公優先の日本の近代化の偏向を見抜いていた」「形・公優先の近代化への批判が、国家に背を向けることなしになされていた」と述べ<sup>2</sup>、また関谷博は「画一化・規格化への抵抗」と「現場で働く人間の具體的知と、「実用経済」と不可分な技術の在り方こそ、学ぶべきという認識」とがあったと指摘する<sup>3</sup>。これらを踏まえると、日本製の工芸品づくしには、「良工」への共感・同情を読むことが可能であり、国家の近代化への批評的態度や、実用を重んじる露伴の人生観の表れと読むこともできる。だが本論では、さらに即時的・微視的な態度で、この冒頭が、初出時においてどのように読まれる可能性があったのかを考察するところから始めてみたい。とくに新聞連載小説として、日々掲載される記事群とともに読まれることで生じる相互作用、そしてそれを作者自身も意識し、あるいは利用し得たであろう状況を想定しての読解を試みたい。

そもそも、露伴が新聞に本格的に携わったのは、客員であった『読売新聞』よりは、次に社員となった国会新聞社の『国会』であった。この新聞は、その名の示す通り第一回帝国議会が開かれた明治二十三年一月二五日に創刊されたが、特徴はその読者層にあるといえる。新聞史的には、自由民権運動の終焉とともに、政治思想のための大新聞と大衆向け小新聞に二極化していた新聞が、明治二〇年前後に中立化し、報道重視になっていくとされる時期に当たる。ただ、その状況をもう少し詳しく見てゆけば、矢野龍溪主宰の『郵便報知新聞』のように、脱政治新聞を目指す一方で、得意な報道分野（海外情報など）を強力に打ち出し、読者が複数の新聞を購読することを推奨し、廉価にして成功したように、読者層をイメージし、記事内容に特色を持たせた販売戦略を行う時代になっていた。『国会』も大阪から東京へと進出してまもない東京朝日新聞社（村山龍平経営）が、主筆に末広重恭（鉄腸）を迎えて立ち上げた別働隊（国会新聞社）であり、末広は創刊号の「『国会』発行の趣意」において、対象とする読者に向けて、次のように記していた。

今日の新聞紙は少数なる政事家、又は一二党派の機関となして其の意見を代表するに外ならず。其の然らざる者は或は商業上の事を専らとし、或は稗史小説を掲げて専ら婦女子の好に投ずるに外ならざるなり。其の

各科専門の学識を備へて注意を政事家に与へ、党派の進路を指南する者に至つては果して幾許かあるや。之に加ふるに、文運進歩の今日に於て文明の器具たる新聞紙の効用を全うせんとすれば、決して空疎の意見に因りて社会の事物を判断すべからず。各科専門の学問識見あるを要す。吾輩、此「国会」を発行するや、実に此の二者に注目して、以て明治二十三年十一月二十五日以降の政事上社会上の必要に應ずる新聞紙たるの効用を全うせんことを予期せり。

(傍線論者、以下同)

末広の言葉から、『国会』は当初より、国会開設後に活躍すべき「政事家」を具体的な読者としてイメージし、専門的な学識をもつて、「文明の器具」となり、彼らを導くことを目指していたことがわかる。帝国憲法とともに公布された衆議院議員選挙法が規定したように、当時の選挙権は満二五歳以上の男子で直接国税（地租及び所得税）一五円以上を納める者に限られる特権であり、被選挙権は満三〇歳以上の男子で選挙権と同じ納税要件を満たしている者にのみ与えられた。華族互選の貴族院議員も含め、社会的な信頼と責任を前提とする男性たちのための新聞メディアであったことになる。もちろんそれ以外の読者も現実的には存在しているはずだが、ひと月の購読料が四〇銭と、『東京朝日新聞』の三〇銭よりも高く設定されており、経済的に豊かな、それゆえに社会的な影響力が期待される階層が主要購読者とされ、なかでも国会議員をはじめとする「政事家」を意識した新聞であったことをまずは踏まえておきたい。

内容も、『東京朝日新聞』や『読売新聞』に比べてみれば、巷説などがほとんど見られず、識者の署名入り記事も多く、学究的な志向が強い露伴に合った編集方針だったのでないかと思われる。先の末広は、

我が社を組織する者は嘗て大同新聞東京公論の二社に在つて其の健筆を揮ひし人々にして、不肖重恭も亦た社末に連なれり。之に加ふるに屈指の小説家と云はるる幸田露伴氏、及び批評家中に於て大名の赫赫たる石橋忍月氏も来つて我が社に入れり。新聞社多しと雖も、其の人を得るの盛んなる恐らくは我社に如くものあらざるなり

と続けており、自身も政事小説家として名をなしていたが、露伴や忍月といった文学者たちに重きを置いていた様子が見える。『読売新聞』の社友としての立ち位置とは異なり、ある種の責任が露伴に加わったものと考えてよいだろう。なにより、読者層を限定しづらい『読売新聞』とは異なり、『国会』は想定読者が明確であることも

重要である。

そして露伴は入社してまもなく、「愛護精舎快話」という、自身の感慨や思想を述べる短文の掲載を始めていく。「愛護精舎」は谷中の露伴宅をさす号だったようだが、そもそも「精舎」とは、心の宿るところという意味なので、精神のありように根ざした「快話」を提供しようとしていたのだろう。これは明治二三年一月二五日に始まり、断続的に掲載されていく。ただ、明治二四年八月七日掲載分から「愛護」が「靄護」と表記されるようになった。「靄護」という熟語は管見の限り見当たらず露伴の造語と思われ、アイゴと読めるので「愛護」に通じつつも、「靄」もや」の表記から迷いなどの深意もあるのだろう。この頃、露伴に精神的危機があったという証言もあり、そうした状況が表記変更につながったと想像することもできそうである<sup>4</sup>。同年一月二日の「其四十二」に「精舎快話終了」と見え、「五重塔」連載前半まで続いていたことになる（ただし、その後も「靄護精舎主」名義での執筆は見られる）。

「愛護精舎快話」の初回掲載時（『国会』明治二三年一月二五日付）、さつそく露伴は美術に関する三つの話を載せた。まず、ある職人の話を「美術」の話題として読者に提供している。江戸初期の「塹工師」（装剣金工師）の名人「土屋安親」（入道後に「東雨」）について、横谷宗珉と並び称されていたことから「実に一世に冠たること能はざるも」と言いつつ、「亦百年に誇るに足るの手腕を有せる英霊底の漢たり」と評価した上で、東雨の書簡中の言葉「何事も技倆を好く致し度候はば心のむさき事なきやうに是第一なり、細工人は一生貧なるものと心得、つねに心のよごれぬやうにいたしたく候」を引き、次のような感慨を述べる。

嗚呼是れ東雨が東雨たる所以のものにあらずや。貧苦も富貴も東雨が鉄桶の如き胸郭を穿つ能はず、鑽るあたはず、而して其鉄桶中に能く蓄へられしものは唯真に美術国裏に住せる人のみ採り醸し得べき其国の花の蜜のみ。富を欲するも心のむさきなり、名を欲するも心のむさきなり、道に協はむ善に与せむと欲するも亦心のむさきなり。さる人の胸郭は海綿の如く孔多くして何者をも能く浸漸透過せしむる代りには、決して最も良きものを醸し出すことあたはざらむ。（其一一）

「真に美術国裏に住せる人」は、貧富や名誉だけではなく、道徳にも縛られず、ひたすら己の腕前を磨くことに邁進し、何かにとらわれた「心」を「むさき」もの、下品なものとして退ける。何かを欲したり何かに与したりす

る「心」は、様々なことを吸収できるかもしれないが、肝心の「最も良きもの」を生み出せないという。この考えに「東雨が東雨たる所以」というように職人の全き個性を見出している。そして次話においては、「美術家」の道徳問題を、職人を例に語る。

美術家も人なり、故に美術家たるの故を以て其人の放逸無残を免すあたはざるは勿論なり。されど人間のひととしては飽まで人間たらざるべからざる如く、美術家のひととしては飽まで美術家たらざるべからず。さるに美術家のひととして有すべき覚悟にまで人間のひととして有すべき覚悟を闖入せしめ雑居せしめ、或は内の覚悟を逐ふて外の覚悟に代らしめんと欲する者あり。かかる輩は全と片とを弁せず、統と偏とを知らざるものなれども、人間一般の上より見れば毒を流さざるに似て其実美術界に太甚しき弊を貽するものなり。況や区々たる小笠原流のごとき礼式を以て、政宗貞宗が膝を律し運慶快慶が居ずまひを糺さんとするに於てをや。嗚呼治工は治工の膝の立やう、仏師は仏師の坐りやうあり、仮令神の前、仏の前に至るとも、其槌を把り其鑿を保持するに當つては諸肌抜き大胡座かきて何の憚かるところかあらむ。詩人の如きは能ふべくんば、基督にも教へ瞿曇にも教ふべきものならむ（「其二」）\*注―「瞿曇」は釈迦の出家前の名

ここでも「美術家」が「美術家」であるための存在意義に関わる本質的議論が展開されている。「美術家の覚悟」にまで一般道徳や形式を押し付けることを、露伴は「闖入」「雑居」といった語彙を使って批判する。たとえば「雑居」は、この時期に内地雑居問題で頻出していた言葉であり、他者・他国との境界を意識させる。「美術界」にはそれ独自の世界の在り方があるとし、「人間一般」からの侵略を排し、「美術家」の内なる覚悟に、あたかも一国としての独立自立を宣言してみせるのは、条約改正という難題を抱えていた「政事家」たちに訴える論理でもあつたろう。そして「詩人」とは、そうした「美術家」たちの「人間一般」とは異なる世界を教示できる存在だというのである。ちなみに「其三」では、李伯時、尾崎紅葉、山田美妙の例を挙げながら、描く素材の高下で、画家・詩人の高下は決まらないことを述べる。これは当時の歴史画の題材論争を視野に、意見を添えたものだろう。

露伴は『国芸』に登場して早々に、侵されるべきではないものとして、精神世界を有する「美術国」のイメージを提示しており、それは同時に常識に囚われず、己の技を磨く以外の何者にも煩わされない孤高の人という新しい職人像―おそらくのちに近代的な芸術家像に連なるもの―のイメージを提示していた。いわば露伴は、「政事家」

たちにむけて「美術家」像による職人像の更新をしていたことになる。

そして露伴が『国会』紙上で最初に職人を描いた小説が「辻浄瑠璃」（明治二四年二月一日～二六日）「寝耳鉄砲」（同年三月一日～四月二六日）の連作である。幕末に釜師の名家に生まれながら、義太夫に入れ込み家業を放擲し、その後の奇縁と生まれ持ったセンスによって砲台鑄造で成功した男を描いたものだが、露伴の理想を知る読者は、この職人が理想的な「真に美術国裏に住せる人」ではないことがわかる。続いて長編となった「いさなとり」（同年五月一日～一月六日）は、捕鯨が江戸の職人絵にも描かれており、同じ職人への関心の上に成立した小説とはいえそうだ。ただこの主人公も、地元を出奔してからの有為転変の人生に醍醐味があり、「真に美術国裏に住せる人」とは言えそうにない。ただいざずれも、新聞創刊以来掲載される、議会や政府における海軍軍備拡張（軍艦や砲台増設）の議論や、水産業の話題の中でもとりわけ注目されていた捕鯨関連記事に連なる素材でもあった（「いさなとり」の結末に、主人公の息子が海軍軍人となって登場する点などにわかりやすい）。露伴は、新聞紙面に表れる社会的関心事のなかでも国家建設に密接な話題に対し、幕末期を生きた職人たちの物語を提供していた。だが、「愛護精舎快話」を読んだ新聞読者から見れば、露伴は、理想よりも現実的な、決して完璧ではない職人の人生を立て続けに連載していたともいえ、そしてようやく「五重塔」に至って、「真に美術国裏に住せる人」となる可能性を秘めた職人・十兵衛が登場することになる。

## 二、シカゴ万博準備記事の増加と小説「五重塔」の登場

偶然ではあるが、『国会』への露伴入社は、シカゴ万国博覧会の開催が正式に公布された時期でもあった。そして、シカゴ万博は、紙面上においても、美術振興の議論を活性化させていくものになる。

シカゴ万博は、コロンプス来米四〇〇年記念でもあることから閣龍世界博覧会（The World's Columbian Exposition）ともよばれ、明治二三年四月には実施決定が日本国内にも伝わり、三年後の明治二六年五月一日から一〇月三〇日まで開催された。

公式には明治二三年一二月にアメリカ合衆国政府より通知がなされ、翌二四年三月に農商務省大臣にして宮中顧

問官の九鬼隆一に組織を委嘱、五月に国会にて博覧会関連予算の緊急決議が通過している。六月に「勅令第五十二号」によって農商務省内に臨時博覧会事務局が置かれ（同省大臣陸奥宗光が総裁を兼務）、同時に『官報号外』にて米国政府作成の規定が公開された。出品可能な種類は、人類のみならず自然の生産物をも含む一三区分・九七八類あり、膨大な範囲に及んだ。日本が賛同した理由は「帝國政府は両国の交誼に對し、又本邦物産の興隆を圖り、且つ本年三月の帝國議會の建議を納れ」たためとあり、それまでの主に政府が取り決めた海外博覧会参加とは異なつて、政府と帝國議會の総意のもと、二年以上の準備期間を経て、輸出拡大を目指す一大イベントとなつた。

『国会』紙上では、明治二四年七月一六日から二九日にかけて「米國シカゴ府大博覧會場」の見出しで会場となる苑芸館、政府館、農業館、事務局、機械館とともに美術館の図が掲載されている。また、八月二〇日・九月五日・同一日には「シカゴ特別通信」として加藤寛による「万国博覧會彙報」が載る。現地視察に欧州各国の關係者が集まつてきていることや、美術館の建築場所が決まつたこと、美術の部のカテゴリーの改正の件が報じられている。八月二二日には寄書欄に佐久間貞一の「職工の資格を論ず」が掲載され、農商務省大臣が職工の條例に関する意見を各地商業會議所に求めていたことに對し、まずは工業學校の卒業生などの資格を定める必要があるという意見であり、大工の職工社會を例に論じている。これもシカゴ博覧會に合わせる動きである。九月一日には「シカゴ博覧會の經費に就て」で、第二議會に提出される追加予算案が報じられた。（ちなみにこの夏頃、『国会』に對して御用新聞・政府新聞という風評がたち、末広が「日本國新聞紙の公德、社會の公明正大なる裁斷を待つ」（九月八日付）、『新聞紙の背徳』（九月一〇日付）で反論を示しているが、これは陸奥宗光など政府に近い人物との關係が疑われたためであつた。）

シカゴ万博の重要な情報源に『官報』があるが、『国会』と『東京朝日新聞』を比較してみると、『官報』掲載の告示の転載については、『国会』よりも『東京朝日新聞』の方が熱心だつた。主筆・末広が鉄腸居士名義で『国会』紙上に連載していた「政事小説 嫩緑」第四回（明治二四年一月九日付）に登場する国会議員や紳士の會話に「官報や新聞の筆記で時々御議論を窺ひますが」とあるように、政事家は直接官報に接することが可能だつたゆえと思われる。『官報』は『国会』読者たち共通の情報源であることが前提であつたのだろう。そこで『官報』も確認しておけば臨時博覧會事務局は、識者たちとの意見交換を行いつつ、明治二四年一〇月二日より一か月に一度のペー

スで博覧会に関する告示を掲載していたことがわかる。

『官報』明治二十四年一月二日付「告示第一号」

「博覧会事務局告示要旨」（農商務省大臣 陸奥宗光）

明治二十六年北米合衆国シカゴ府ニ開設スルコロロンプス世界博覧会ニ普通商品美術品及美術工芸品を出品セン  
ト欲スル者ハ左ノ要旨ニ依ルベシ

一、普通商品ハ貿易ノ標本トナリ広告トナルヲ以テ目的トナシ将来ノ需要ニ応ジ得ベキ物品ニシテ且ツ實際ニ  
貿易シ得ベキ価格ヲ定メ尚ホ必要ナル説明書ヲ付スベシ

一、美術品及美術工芸品ハ妙技ヲ示シ名誉ヲ揚グルヲ以テ目的トシ精良ノ製品ヲ出シ各自特有ノ技術ヲ顕ハス  
コトヲ勉ムベシ

この告示では、さらに「普通商品」「美術品」「美術工芸品」についての詳細な説明がなされている。西洋の絵画  
や彫刻に相応したものは「美術」とされ、それ以外の「高級工芸品」が「美術工芸」と呼ばれたことは、すでに日  
本近代美術史の研究に詳しい<sup>7)</sup>。問題は、「五重塔」連載直前に、それが明文化されていたというタイミングであ  
る。「美術工芸品」については、次のように告示されていた。

美術工芸品ニ於テハ美術ヲ応用シテ、器物ヲ製造スルモノナレバ、純粹美術品トハ其趣ヲ異ニスルモノア  
リ。其器物ヲ製スルニ方リ、六要アリテ存ス。之ヲ略言スレバ左ノ如シ。

一 品位 高尚ニシテ氣韻アルベシ

二 適用 大小軽重需要ニ応ズベシ

三 撰材 耐保ノ良否、施工ノ適否ヲ考フベシ

四 作法 堅牢ニシテ着実ナルベシ

五 形象 用ニ適シ、優雅ナルベシ

六 裝飾 細大其物ニ応ジ、昼夜ノ所用ヲ考へ、且遠近ノ度ニ從テ其宜ニ適スベシ

然レバ単ニ此一品限りニシテ嗣後同品ヲ製出セズ、特ニ妙技ヲ示スニ止マルモノヲ除クノ外ハ、時用ノ便否、  
価格ノ当否ヲ熟慮シ、新古ヲ折衷シ、優雅ナル我本色ヲ顕ハセル精良品ヲ製出シ、各自ノ名誉ヲ顕揚シ、他ノ



愛敬心ヲ發起セシメ、彼ノ嗜好ヲ惹起シ、時ノ流行ヲ支配セシムルノ工夫ナカルベカラズ。然リ各自ガ特得ノ妙技ヲ尽シ、此標本ヲ以テ広告シ、輸出ノ増加ヲ將來二期スベシ。即チ貿易ノ盛衰ニ關係スルノ重大ノ事柄ナレバ、此種ノ製造者及ビ出品主ハ深く省慮ヲ要スル所ナリ。若シ此標準ヲ誤ルトキハ一時一己ノ損失ノミニ止マラズ本邦ノ名譽及ビ經濟ニ關係ヲ及ボスコト尠少ナラズ。出品者豈各自ノ本文ヲ勉強メザルベケンヤ。

このように、実用も可能で、かつ品位あるものを「美術工芸」とし、出品者が己の名譽もあげ、国家の名譽と經濟を背負うことが使命とされていた。

『国会』独自の記事としては、一〇月三日「金鶴羽氏の小遭難」と合わせ「シカゴ大博覧会委員朝鮮国王に謁す」がある。前者は、甲午革命を主導し、李氏朝鮮の文人で日本にも留学経験のあった金鶴羽の下人が京城の日本酒店で盗賊扱いされたという遭難を報じ「日本人」が「朝鮮人を愚視する」状況の酷さを物語り、金鶴羽の日本轟負を報じたもの。後者は、シカゴ博覧会の委員のグースター・ガワード（グース・タヴス・ガワード）が「朝鮮王国臣民の出品を望む旨」を述べ、朝鮮国王が賛同し、「朝鮮素より奇物異品に富める所なれば世界大博覧会開場の暁には必ず大方の大喝采を博すならん。氏は近々日本に来ると云へり」といったもので、「朝鮮王国」の文化としての自立性を賞賛するもの。博覧会問題そのものという語り方ではなく、朝鮮問題というアジア情勢の中で、シカゴ博覧会を意義付ける記事を載せているといえよう。紙面掲載された『官報』情報には、臨時博覧会の組織に関する一〇月六日「臨時博覧会訓令一号」、一〇月一〇日「東京府告示第九三号（出品について）」があり、『国会』は他新聞より政治・貿易面、すなわち国際競争方面でのシカゴ博覧会への注目の方が勝る。

そうしたなか、「いさなとり」も終わりに近い「其九十三」が載る『国会』明治二四年一〇月二〇日付の第一面に、社説「第二議会の一問題 美術の保存及奨励」が掲載された。社説は無署名だが、主筆の末広によるものと推定される。

予算と云ひ、法律の改正修正案と云ひ、固より重要なものと雖も、亦た邦家大局の上より一日も勿がせになすべからざるものにして、未だ甚だ世人の脳裡に入らざるものあり、邦家の大局の上より勿がせになすべからざるのものとは条約改正の事か、東方問題の事か、否々条約改正の事、東方問題の事たる、業既に世人の脳裡に入り来りたりと雖も、日本立国の大主眼たる美術の保存及び奨励に関する問題に至りては、冷々澹々として之

を顧慮する者特に絶些なるは、邦家百歳の長計の爲めに、吾輩の深患とする所なり、併して議員諸氏の顧慮を大に博せざらんや。

「日本立国の大主眼は美術に在り」との解釈に至りては、吾輩の殊更ら此処に曉々せざれども（吾輩曩に、之れを本紙上に縷述せり）、日本美術の一種摸倣すべからざるの特性の存在するあるを以て、大いに邦家の品位を嵩め、暗々の裡、冥々の間に日本国民の価値勢力を増進せるは、人々の知了する所、而して幕府一敗、維新革命後、旧物破壊と共に、一種奇怪なる功利経済的の感念は国民の頭中に勃生じ、（中略）天然の美術は破壊残傷され、人為の美術は散逸紛失し、日本国民の拠て以て暗々裡、冥々の間に其の品位を嵩め、其の価値勢力を増進したる一大原動力は日に歳に耗盡せんとす（中略）軍備拡張は有形的に日本の威厳を現示するにあるとせば、美術の保存及奨励は無形的に闡示するものなり、有形無形相綜合調和して一国の真成なる面目初めて聳立す。軍備拡張にして果して一日も勿がせにすべからざるものとせば、美術の保存及び奨励亦た一日も勿がせになすべからずとなす。

この社説は、条約改正、法整備以上に、世界を視野に日本の地位向上を目指すための美術の力の養成が必要だと主張し、第二議會で是非とも議題にすべきと論じている。なにより、この美術問題への認識が国民の間にほとんど浸透していないことを懸念し、そうした議論ができるようになることを読者である「議員諸氏」に求め、「軍備拡張は有形的」「美術の保存及奨励は無形的」というように有形無形という二項対立の構図によって、その対外的な威力を軍備と対等にし、美術保存と振興の重要性を伝えようとしている。「日本立国の大主眼は美術に在り」という主張を紙上にて繰り返してきたとの念押しも見え、ここからすれば露伴の美術についての一連の著述は、社の方針によつても後押しされ、紙面とも調和していたとみて良いだろう。職人を主人公に描き続けていただけに、「軍備拡張」に比肩する、あるいはそれ以上の価値を有する「美術」の物語を示すことが、露伴に期待されて然るべきところだろう。

そして濃尾大地震が発生した明治二四年一〇月二八日の翌日、震災報道が本格化する前の『国会』一〇月二九日付紙面一面には、「いさなとり」の「其九十六」と同じ段に、雑報「美術院の設置」という記事が載る。

仏国等に於ては美術省を置いて行政の一部となし其の美術を監督奨励するものあるに、美術を以て世界に有名

なる我国に於て、却て未だ美術を奨励するの道を設けざるより其弊や千古の宝器も■蝕鼠壞に委するにあらざれば、或は遠く海外に輸送せられて外国人の手に落つるもの多かりしのみならず、市場は自から濫製粗造に向き日一日に其の価値を落さんとするもの如し。従来宮内省に宝物取調所を置き、内務省に古物の保管方法を定め、文部省に美術学校を設け、農商務省に博覧会を開きて以て我邦美術の保存奨励のことに着手したるもの、皆美術を主管するものにあらざれば、未だ以て美術一般の保護と奨励とを全からしめたるものと云ふべからず。且又美術は教育学問に根柢して、學術の進歩を相離るべからざれば、仏国の如き伊国の如き文部と美術とを伴管せしめたる、蓋し之れに職由したるならん乎。故に我が国に於ても新に美術省を置き以て行政の一部となし、美術のことを督励せしむべしとの説を唱ふる者あり。此は美術熱心家の空想説たるにすぎざれども、今美術院なるものを置きて、文部省の直轄に属せしめ、美術に係る事務を総括することなし。美術をして教育と學問と相背馳することなからしめたらんには、将来は我が人民に固有する美術の思想を發達し、古今の美術を保存して散逸することなからしめ、為めに輸出の美術品を精巧ならしめて、其名声を海外に發揚するに至らんと此頃密かに美術院を設置するの必要を主唱する輩ありと云へば、或は他日輿論の一問題をも成立するなるべし。

(■ || 活字摩滅のため解読不能)

ここでは、美術保存の対応策の不足が語られ、さらに美術を教育学問の根柢にし、「我が人民に固有の美術の思想を發達」させて「古今の美術を保存」することが、美術品の輸出を成功させ、「名声を海外に發揚する」ことにつながるのと鼓舞する内容になっている。「美術省」や「美術院」を望む声に、「美術」の独立を目指すことで、国家レベルで地位向上を図ろうとする一貫した趣旨が伺える。

そして一月六日、「いさなとり」の連載が百回で終了し、翌七日付紙面から、急遽「五重塔」の連載が始まる。連載にあたり露伴は「手斧初め」という言葉を用いており（「いさなとり」最終回に付された予告、美術による日本立国の急務に際し、震災という危機に直面した小説家が立ち上がった姿を、読者たちは見出したのではないだろうか）。

「五重塔」の「其二」が掲載された十一月一〇日の五面二段雜報欄の記事「美術名譽祝ひ」には、

唐木細工商神田小川町加藤良助方にて二、三ヶ月前水戸永町本間某よりマエブトの良材にて書棚の注文あ

り。同家の職工丹精して作り早速水戸へ運送せしに、先方よりは其巧妙なるを賞し、代金の外に若干の金を送り来りとして同家にて大いに悦び内々にて美術名譽祝ひと名け三、四日前その祝宴を開きたるよしとあり、唐木細工商の職工がつくつた書棚が巧妙だったことから依頼人から礼金を与えられ、その商人は「美術名譽」の祝宴を開いたという出来事が紹介されている。このように、腕前を發揮せんとする職人に理解のある商人、そして依頼人の存在に焦点が当てられ、美術による日本立国を目指す指導者たちのあるべき立ち居振る舞いを示して見せている。

そのほか震災報道期に一時的に減少は見られるものの、美術にかんする記事は頻繁に見られる。「五重塔」連載前後に絞り、主なシカゴ万博及び美術関連記事をあげておきたい。

明治二四年

- 一〇月 一日 「世界博覧会出品の運送費」
- 一〇月 三日 「シカゴ大博覧会委員朝鮮国王に謁す」
- 一〇月 六日 「臨時博覧会訓令一号」
- 一〇月一〇日 「東京府告示第九三号（出品について）」
- 一〇月一三日 「米國シカゴ府大博覧会の出品物」
- 一〇月一五日 「大博覧会における農務局の出品」
- 一〇月一六日 「世界大博覧会評議委員会」
- 一〇月二〇日 「第二議會の一問題 美術の保存及奨励」
- 一〇月二九日 「美術院の設置」
- \* 一二月 七日 「五重塔」連載開始
- 一二月一〇日 「米國博覧会経費の提出」 「美術名譽祝ひ」
- 一二月一五日 「米國博覧会出品の七宝焼被害」 \* 濃尾震災被害
- 一二月一八日 「外国に於ける縦覧物と出陳物」
- 一二月一〇日 「コロンブス世界博覧会費」 \* 兩議院で博覧会予算通過

一二月二五日「コロムブス世界博覧会の通券と賞牌」  
明治三五年

一月二八日「シカゴ博覧会に関する参考の一助」  
「世界博覧会への出品に就て」

一月二九日「シカゴ博覧会に関する要報」

二月三日「官報―コロムブス世界博覧会に関する物件の売買貸借  
及工事請負を随意契約に依り処分するの件」\*「勅令第一二條」

二月一日「前田正名氏の談話」

二月二四日「世界大博覧会水産館」

三月一日「本邦漆器の将来」\*漆器の信頼回復について

三月四日「貨幣塔」「東京彫工会の総会」「日本漆工会の漆工協議会」

三月五日「貨幣塔（社説）」

三月六日「日本動物の塑像」

三月一〇日「博覧会出品荷造の注意」「古像の配置」「嵩山堂の美術木版画」

三月一五日「古代の漆器」「日本美術会の常会」「美術展覧会」

三月三一日「閣龍博覧会に就き（在シカゴ市 津田雄象再信）」

四月一六日「世界博覧会費の継続費支出方に就て」

\*四月一九日「五重塔」連載終了

先に引用したものも含め、こうした一連の記事内容から、国会での審議の目玉となる予算問題や、幕末明治にかけてすでに輸出されていた工芸品の中に質の悪いものが流通したため、その名誉回復などが大きな話題になっていたことがわかる。「五重塔」冒頭の上質な工芸品は、輸出の名目での粗製濫造が懸念されていた工芸品の、本来のあるべき姿であり、国家の「名誉」回復を担うことが期待されていた「美術工芸品」を思わせるものであったと考えられる。

露伴が美術の話題のなかで職人を語ることは、独自の問題ではなく、むしろ新聞に馴染むものであった。露伴が

「美術国」というとき、それは社説にあつた「日本立国の大主眼は美術に在り」という志向と矛盾するものには見えにくい。とりわけ「五重塔」連載直前の一ヶ月間は、博臨時博覧会事務局による「告示」によつて、具体的にシカゴ万博の準備内容が国民に示され、新聞もまたそれを強く意識し、美術、そして美術工芸による「日本立国」を実現させるべきという機運が本格的に醸成された時期であり、『国会』は政事家をその関心に誘うべく鼓舞する記事を載せていたと言える。

そうしたなか露伴が、『国会』紙上において「議員諸氏」を相手に、「一人殺しぢや二人殺しぢや、醜態を見よ讐をとつたぞと号きちらす。おもへばこれも順々競争の世の状さまなり。」（「五重塔」「其二」）と前触れし、職人たちの死闘に見紛う「競争」の物語を登場させた意味を改めて考えてみたい。

### 三、形而上の美術立国

作中、源太は塔建立への想いを、次のように開陳している。

源太はいよいよ気を静め、語気なだらかに説き出す。まあ遠慮もなく外見もつくらず我の方から打明けやうが、何と十兵衛斯しては呉れぬか、折角汝も望をかけ、天晴名譽の仕事をして持つたる腕の光をあらはし、慾徳では無い職人の本望を見事に遂げて、末代に十兵衛といふ男が意匠（いせう）ぶり細工（さいこう）ぶり此視て知れと残さうつもりであらうが、察しも付かう我とても其は同じこと、さらに有るべき普請（うづま）では無し、取り外（はず）つては一生にまた出逢ふことは覺束（あは）ないなれば、源太は源太で我が意匠（いせう）ぶり細工（さいこう）ぶりを是非遺（い）したいは（其十三）

源太は、「名譽の仕事」、「慾徳では無い職人の本望」をなし遂げることには「意匠（いせう）ぶり細工（さいこう）ぶり」を後世に残すことだと言っている。源太の発言には、明治二一年一二月に発令された意匠（いせう）条例によつて本格的に普及しはじめ明治中期の美術振興において重要な概念となつていた「意匠」と、なにより「名譽」という言葉が見える。そして同時に、誰かに理解され、評価される世界を前提に、源太は生きている。読者から見ても、職人たちが博覧会・共進会による賞を得ることは幕末以来推奨されていたことであり、シカゴ万博の「告示」において、「美術品及美術工芸品ハ妙技ヲ示シ名譽ヲ揚グルヲ以テ目的トシ」とある事態にも通じる。もちろん、源太は「辻浄瑠璃」「寝耳鉄

砲」の主人公とは異なり、心掛けも前向きで、だからこそ棟梁として出世しているのだが、逆に言えば塔を建立すること以外のさまざまな世俗のことに関係していることになるため、そうした「心」ですら「むさき」ものとする露伴が語った真の「美術国」では、決して最上ではないことになる。

一方十兵衛は、この源太の「名誉」と「意匠」をめぐる主張そのものに反論することはない。ただ二人で造ろうという源太の申し出を「情無い親方様、二人で為うとは情無い、十兵衛に半分仕事を譲つて下されうとは御慈悲のやうで情無い、厭でござります、厭でござります」といい、「一ツの仕事を二人でするは、よしや十兵衛心になつても副になつても厭なりや何しても出来ませぬ」と頑なに断るのである。

登尾豊は、源太が「作品に自己の明証を求める人物ではない」ために、「私の欲求に駆られた十兵衛の真意をついに理解できない」と指摘する<sup>10</sup>。ここでひとつ気になるのは、当時、美術を巡る諸言説において、こうした心得、態度の議論が現れていないことである。露伴が「十兵衛に託して芸術家像の造型を企てた」という登尾の指摘に同意したいが、ただ、新聞連載時の読者には未知の思考を持った新しい人物像に見えたのではないだろうか。というのも、実際、夫の態度が理解できない妻のお浪（お浪は十兵衛を「天魔」に魅入られたのかと責めている）に向かつて、十兵衛自身が解説する場面が配置されているからである。

「十兵衛が仕事に手下は使はうが助言は頼むまい、人の仕事の手下になつて使はれはせうが助言はずまい」とお浪に向かつて説明するとき、読者ははじめて、頑ななまでに自らだけを頼みとする職人の態度が存在することを知る。そして、同じ職人でありながら、源太もまたこの十兵衛の潔癖なまでの創作家としての態度が、塔建立以外のあらゆるものを度外視する心意の激しさに由来することを想像できないでいた。十兵衛は上人に真情を吐露した際、たしかに世渡り上手な源太を羨ましいとは言っていたが、それよりも大事なのは「腰拔鋸のやうに生て居たくもないのですは」という生存そのものにかかる理由であった。十兵衛にとつて重要なのは、ただただ己が思い描いた理想の塔の建立を実現することであり、すなわちそれが己の一生にかかわる生き様に関わっていた。

もちろん十兵衛の「意匠」がすぐれていたことも示されている。作中、五重塔の雛形が登場する。そもそも十兵衛が上人のもとに塔建立嘆願のために訪れる決心をしたのは、この雛形が前の晩に完成したからである。

晴れて居る空を見ても燈光の達かぬ空の隅の暗いところを見ても白木造りの五重の塔がぬつと突立つて私を見

下して居りまするは、とうとう自分が造りたい気になつて、到底及ばぬとは知りながら、毎日仕事を終ると直に夜を籠めて五十分の一の雛形をつくり、昨夜で丁度仕上げました（其六）

本作が描いた「谷中感応寺」の五重塔は、当時谷中に住んでいた露伴が同寺の塔をモデルにしたことで知られるが、「江戸谷中長耀山感応寺五重塔図」という二〇分の一の縮尺図を参照してみれば、実測一一二尺八寸、すなわち三四・一二メートルの塔だったとある<sup>11</sup>。「五十分の一」となると、十兵衛は約七〇センチの雛形を作ったことになる。そして十兵衛が人手を頼んで運び込んだ雛形は、上人の目を通して次のように描写されていた。

上人これを熟視たまふに、初重より五重までの配合、屋根庇廂の勾配、腰の高き椽木の割賦、九輪請花露盤宝珠の体裁まで何処に可厭なるところもなく、水際立つたる細工ぶり、此が彼不器用らしき男の手にて出来たるものかと疑はるるほど巧緻なれば（其七）

上人は雛形に十兵衛のたしかな腕前を見てとり、「仮令ば木匠の道は小なるにせよ其に一心の誠を委ね、生命を懸けて慾も大概は忘れ、卑劣き念も起さず、唯只鑿をもつては能く穿らんことを思ひ鉤を持つては好く削らんことを思ふ心の尊さは金にも銀にも比へ難きを」と、まさに露伴の思想を代弁し、「惘然至極なり」と感じ入る。誰にも理解されない十兵衛の「一心の誠」について、上人はその本質が「無価の宝珠」だという。上人が二人に与えた長者の兄弟の寓話では、源太は互いに我慢して分かち合うべき教えと理解し、実際にそうしようという発想になるのだが、十兵衛にはそうした考え方ができない。それは「意匠」についても同様で、上人に十兵衛を助けてやれと言われた源太は自らの「意匠」を分け与えようとするが、十兵衛にはその発想はなく、むしろ他人の「意匠」は無用なのである。上人を契機とした源太の行動が、十兵衛の他者性、すなわち「真に美術国裏に住せる人」の特徴を炙り出す構造になっている。そして、仕事にかかった十兵衛の様子は、まさに精神の世界を生きていた。

十兵衛いよいよ五重塔の工事するに定まつてより寝ても起きても其事三昧、朝の飯喫ふにも心の中では塔を噛み、夜の夢結ぶにも魂魄は九輪の頂を繞るほどなれば、況して仕事にかかつては、妻あることも忘れ果て、兎のあることも忘れ果て、昨日の我を念頭に浮べもせず明日の我を想ひもなさず、唯一ト鏝ふりあげて木を伐るときは満身の力を其に籠め、一枚の図をひく時には一心の誠を其に注ぎ、五尺の身体こそ犬鳴き鶏歌ひ権兵衛が家に吉慶あれば木工右衛門が所に悲哀ある俗世に在りもすれ、精神は紛たる因縁に奪られで必死とばかり



勤め励めば、前の夜源太に面白からず思はれしことの気にかからぬにはあらざれど、日頃ののつそり益々長じて、既何処にか風吹きたりし位に自然軽う取り做し、頓ては頓と打ち忘れ、唯々仕事にのみ掛かりしは愚癡なるだけ情に鈍くて、一條道より外へは駈けぬ老牛の痴に似たりけり。(其二十二)↓初刊「其二十三」

「身体」こそ「俗世」に在るものの、「精神」だけはそこにとらわれない状態が十兵衛の仕事ぶりであった。源太との諍いにも「精神」はとらわれない。「愚癡」の「癡」の字は、正直ゆえの愚かさをさす。だが、その「のつそり」を許容できない「俗世」のために、十兵衛はこの後、刃傷沙汰で大怪我をすることになる。しかしそれにも屈しないことで、かえって職人たちをまとめる契機となった。

しかも十兵衛の貧困ぶりは塔が完成した後、ますます進む。暴風雨に晒された十兵衛宅は「屋根半分は既疾に風に奪られて見るさへ気の毒な親子三人の有様、隅の方にかたまり合ふて天井より落ち来る点滴の飛沫を古筵で僅に避け居る始末」という酷い状態で、塔の完成で得た世俗の名声が及ばぬところに、十兵衛がいることがわかるのである。何ものをも寄せ付けない故の貧しさは、「心」が「よこれぬ」ことを裏付けるものだ。「愛護精舎快話」は示唆していた。ただ、のちに露伴は、十兵衛のモデルの一部となった「倉」という大工を「無学の聖人(君子)」「妙な男」と呼びながら、「慾はなく、処世の才はなく、併し技術には頗る達してゐるやうに、私等素人目には見え」と評価しており<sup>12</sup>、決して非現実的な存在ではなかったであろう。

暴風雨の後、市井の老若男女は十兵衛と源太の関係を、親分子分かそれとも商売敵かと話題にしているが、逆に二人はそうした世俗の競争を抜きん出ている。十兵衛は「彼塔倒れたら生きて居ぬ覚悟であつたさうな」と噂され、そして塔の下を徘徊していた男・源太については、人々の噂話の中で、塔の損壊は「同職の恥辱知合の面汚し汝はそれでも生きて居られうか」、「武士で云はば詰腹同様の目に逢はせう」としていたらしいと語られる。ここにおいても、塔がそのまま己の命である十兵衛と、名譽を生きる源太との違いが見て取れる。

実は、連載中に、露伴はこの二人を理解する上で読解の助けともなる文章を掲載している。上人に二人が呼び出された直後の様子を語る「其十」と「其十一」の連載の間に掲載された「靄護精舎快話」(『国会』明治二四年一月一日付)の「其四十」にある「慾」の話である。露伴自身がかつて考えたこととして語られるそれは、「慾」を「外慾」(生命保全のために發揮される慾)と「内慾」(生き方に対して發揮される慾)とに分け、それぞれ

れさらに「根本慾」と「依本慾」とがあるとする考え方を示すものとなっている。特に「内根本慾」は「技術の精ならんことを欲し、学問道德の進まんことを欲する類」で「非対世間」であり、より十兵衛の属性に近い。逆に「内依本慾」は「名誉等を欲する」もので「対世間」という性質を持ち、こちらは源太により強く見られる属性であろう。「大人は死すとも此根本慾を捨てず」とあり、露伴は「慾」を基本に「大人」の行為を解釈し、自らの「慾」の小ささを嘆くのだが、ここからすれば「五重塔」は本来、「内根本慾」の「大人」である十兵衛が、塔の建立を夢見たことを契機に、源太をはじめとする「世間」に対することになった話となるだろう。ちなみに「大奸雄」は四つ全ての慾を満足させようという「大意欲」を持つもので、「大聖人」は逆に四慾に超然としてその上で満足を得るための「大意欲」を持つものだとしているところであり、後者は朗円上人に相当するだろうか。「慾」によって「大聖人」をも理解しようとする発想は、仏教であれ西欧由来の哲学・心理学であれ、「我 (ego)」を前提とした人間観として共通する。

「真に美術国裏に住せる人」の話として読むならば、十兵衛こそがその資格を有している。露伴は、そうした異質な存在を俗世に置き、当時の美術振興の最大の目的とされていた「名誉」を体現する源太と拮抗させた。新聞読者には、その対立を「内慾」の構図によって理解することも可能であったろう。結末で、暴風雨を耐えた五重塔に、朗円上人が「江都の住人十兵衛之を造り川越源太郎之を成す」と銘じ、ふたりの番匠がひれ伏した様は、「内慾」の対立する「根本慾」と「依本慾」とがともに昇華された姿として捉えることもできる<sup>13</sup>。

「五重塔」は職人が名誉を得て、日本立国を新聞読者とともに夢想するような形而下の理想におさまる小説ではなかった。紙面における政事的主張を共有し得た読者からみて、「名誉」に生きる源太という存在はまさにシカゴ万博の準備が本格化するのと同時に活性化された美術をめぐる社説や雑報から抽出したかの如き、上質な俗世の職人像である。そのイメージに對置させることで、峻烈な、狂風の性さえ感じさせるものとして職人の精神が十兵衛によって形象化されたのだろう。読者である「政事家」たちに向けて、形而上の「美術立国」があることを露伴は示そうとしたのではないだろうか。

おわりに、もうひとつの五重塔

本作は、本来、即時的な解釈を読者に可能にする新聞紙の小説として書かれたものであった。新聞連載時、「五重塔」は、震災復興の塔であると同時に、美術立国の塔の物語としても読まれるものであったが、それは後の読者には容易に読み取れるものではなくなってしまうのは当然のことだろう。ただ、新聞連載小説は、掲載されるその一瞬に、言葉の力が発揮されることがある。冒頭の工芸品づくしだけでなく、人物の造形や配置、言葉の選択一つをとっても、即時的に立ち現れるコンテクストにおいてはじめてその選択の理由に思い致る場合があり、テクストが新聞から離れたとき、まさに空白として読者の想像力を刺激するものに変化し、魅惑的なものとなる可能性があるのだろう。

当時の文脈で、明治の高塔といえば浅草の凌雲閣だが、その竣工は、まさに国会開設と新聞『国会』の創刊と同じ明治二三年一月のことである。そしてエッフェル塔が成功を博したパリ万博の後に開催されることになったシカゴ万博にも、早くから塔の建築が噂されていた。一つには世界博覧会塔（コロンブスタワー）、もう一つが貨幣塔だが、シカゴ万博を論じた能登路雅子は「こうした誇大妄想的なアイディアはすべて、世界を驚嘆させる空前のモノキュメントを是が非でもシカゴ博覧会場に作りたいたいというアメリカ人の強い衝動から出たものであったが、いづれも美的、技術的に実現不可能と判定された」という<sup>14</sup>。貨幣塔の噂については『国会』が社説にまで取り上げており、どうやら世界の貨幣を集めて塔を作る話が出ていたらしい。思えば、作中の塔が「生雲塔」という雲を生むほどの高層建築をイメージさせるのは、近代技術による高塔を意識していることかもしれない。ただ実際二年后に、シカゴの会場に姿を現したのは、塔ではなく、巨大観覧車（フェリス・ホイール）であり、それは「アメリカの機械主義と民主主義の精神を素朴に反映したすぐれてオリジナルな作品」であった<sup>15</sup>。

露伴が描いた江戸谷中の五重塔は孤高の職人の精神が生み出した美の表現といえるものとなったが、実は連載中、結末の暴風雨の場面のモデルとなった現実の嵐が報じられたのと全く同じ日に<sup>16</sup>、シカゴ万博に京都・法観寺の五重塔（八坂の塔）が出品されることが公にされていた。

京都の美術家丹羽圭介氏は米國シカゴ府に開く世界大博覧会へ古代建築物の雛形を出品せんと予てより考案中

なりしが、今度いよいよ京都の古代建築物中、洛東の八坂五重塔は千年以上の古代建築物なるを以て、これが十分の一の雛形を造り出品せんと決心し、既に図面は成図を見るに至りし故、近日を以て工事に着手するよし。其の予算金額は千五百有余円の見込なるよし（八坂塔の出品）『読売新聞』明治三十五年二月九日付）『東京日々新聞』などでも欄外記事になっているのだが、『国会』や『東京朝日新聞』ではなぜか掲載されていない。企画した丹羽圭介は臨時博覧会委員の一人であり、後の京都内国勸業博覧会（明治二八年）でも尽力した人物である。シカゴ万博の紹介本『THE BOOK OF THE FAIR』（1893）の美術館の章に、「ホールにはきわめて精巧な京都の八坂の塔の縮尺六〇分の一の模型がおかれている」とある。ただこの塔には、最初工芸館に展示され、会期中に美術館に移されたという特殊な事情があった<sup>17</sup>。背景としては、これもちやうど丹羽の雛形の企画が報じられたのと同じ、明治二五年二月八日、九日に、日本側の美術工芸を工芸館ではなく、美術館に出品したいという要望がアメリカ側で協議され、三月二日に認められており、美術史上画期的な出来事とされていた事態がある<sup>18</sup>。これはシカゴ万博において、ヨーロッパを超えるというアメリカ側の目標に日本が賛同し、日米の蜜月が実現していたためだが<sup>19</sup>、次の明治三三年開催のパリ万博では、再び美術工芸は美術から除外されてしまう。露伴とも交友関係があり、現地を取材した画家・久保田米僊の『閻龍世界博覧会 美術品画譜』第一集（大倉書店、明治二六年一〇月刊）（図1）には、美術館の正面、旭日章の下、中央に展示された

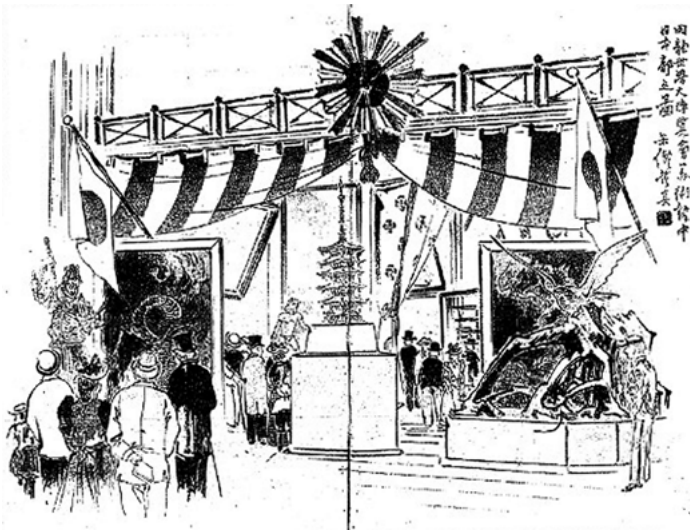


図1 久保田米僊画「閻龍世界大博覧会美術館中 日本部正面」

五重塔が写され、まさに日本の美術工芸の代表として会場で君臨していた様子がかがえる<sup>20</sup>。シカゴ万博において、五重塔の雛形が、美術と工芸との間で不安定に揺れ動いていたことは、十兵衛の精巧な雛形が、揺るぎのない強さを秘めた美として描き出されていたことは、皮肉にも対照的である。

そして明治二八年七月には古社寺保存金出願規則（内務省令）、明治三〇年六月には古社寺保存法（法令）が制定された。社寺の建造物や宝物類の中から歴史の象徴または美術の模範となるものを指定して国費を充てて保護するものだが<sup>21</sup>、最初に法隆寺塔をはじめ六基の五重塔が指定され、国家の文化的精神の象徴として保存されるべきものとなる。露伴「五重塔」の新聞小説としての即時性を経験した読者としての「政事家」たちには、文学が政治に接続していったようにも見えていたのではないだろうか。

## 注

<sup>1</sup> 拙論「耐震元年の「五重塔」―濃尾大地震と〈暴風雨〉」（『日本近代文学館研究年報―資料探索』令和四年三月）

<sup>2</sup> 藤井淑禎「楽境と苦境と―露伴「苦心録」の周辺」（『東海学園国語国文』昭和五四年九月）

<sup>3</sup> 関谷博『幸田露伴論』（翰林書房、平成一八年）

<sup>4</sup> 注1拙論、注3参照

<sup>5</sup> 注3の関谷は、『寝耳鉄砲』の最終章「三十二」について、初版『新葉末集』（明治二四年一〇月）において、新聞初出には登場しなかった「浄珠」という「同時代からの批判者」が加筆されたことを指摘している。浄珠は、まさに商人的な態度を不要とし、ただひたすら「技倆」を磨くことだけに専念し、それ以外を願わないし願いたくないという「心得」を持った人物であった。単行本化時点の改作は、道也という存在を浄珠によって相対化した意義があるわけだが、新聞連載時には一連の露伴の主張の中で読まれたので不要だったと考えたのだろうか。浄珠の職人としての態度は、『新葉末集』刊行直後に新聞連載が開始する「五重塔」の十兵衛に引き継がれていったといえる。

<sup>6</sup> 図録『海を渡った明治の美術 再見！1893年シカゴ・コロンプス世界博覧会』（東京国立博物館、平成九年）

参照

<sup>7</sup> 日野永一「万国博覧会と日本の「美術工芸」」(吉田光邦編『万国博覧会の研究』思文閣出版、昭和六一年)、佐藤道信『日本美術』の誕生 近代日本の「ことば」と戦略(講談社、平成八年)、同『明治国家と近代美術—美の政治学』(吉川弘文館、平成一一年)、木田拓也『工芸とナショナルリズムの近代「日本的なもの」の創出』(吉川弘文館、平成二六年)、北澤憲昭『美術のポリテクス—工芸』の成り立ちを焦点として(ゆまに書房、平成二五年)等、参照。

また、日清戦後の露伴における美術と工芸に注目した論考に西川貴子「美術」をめぐる(物語)—幸田露伴「帳中書」を軸として—(『同志社国文学』六八号、平成二〇年)がある。

<sup>8</sup> 数年先の話ではあるが、開催されたシカゴ万博の紹介本『THE BOOK OF THE FAIR』(1893)には日本の工芸館の出品物が「最近、日本の産物として大衆を誤魔化している未熟な陶磁器や寄せ木細工とはおどろくほど対照的である」と記されており、日本側がいかにも名譽挽回に尽力したかがうかがえる。注6所収訳文参照。

<sup>9</sup> 樋口孝之・宮崎清による「意匠」をめぐる語彙調査(『日本におけるデザイン思考・行為をあらわす言語概念の研究』(1)~(7))、『デザイン学研究』平成一九~二八年)によれば、明治初期の漢語辞書で採録する多くがこの成語を「おもひつき」と訓じているという。また井上哲次郎らの『哲学字彙』(明治一四年)において design の訳語になっており、アーネスト・フェノロサの演説(大森惟中訳)の『美術真説』(明治一五年)をはじめ、明治中期の美術工芸において重要語彙となったともある。そして明治二一年二月に発布、翌月に施行された意匠条例においてデザインを保護する制度が導入されて数年後の明治二五年に刊行された『日本大辞書』の「意匠」の項目に「此語近頃カラ次第第二普通ニナッタ」とあり、社会に認知されるようになったとも指摘している。

「五重塔」では、連載時に広く認知されはじめた「意匠」という美術由来の漢語に対し、「おもひつき」と訓じることで、江戸の源太の言葉に当代的な意味内容が追加されているといえる。ちなみに、同論文(5)は、文学においても、坪内逍遙や二葉亭四迷らの用例から、それが文章上の idea に対応していることを指摘している。加えるならば、露伴『風流伝』において、珠連が考えたお辰の像の最初の「意匠」は「梅桃桜菊色々の花綴衣麗しく引纏せたる全身像」「後光輪」までつけた「天女」のようなものだったが、それを削ぎ落とし裸像にして行く

ことになるので、「意匠」を超越する物語としてこれを読むこともできるだろう。

<sup>10</sup> 登尾豊『幸田露伴論考』（学術出版会、平成一八年）

<sup>11</sup> 江戸のある町・上野谷根千研究会編『谷中五重塔 1644-1988』（谷根千工房、昭和六三年）に拠った。明治三年

四月に実測されたもので、東京都立中央図書館に「谷中感應寺五重塔 貳拾分壹之圖」として所蔵されている。

<sup>12</sup> 「作家苦心談」第九回、「露伴氏が「風流仏」「一口剣」「五重塔」等の由来及び之れに關せる逸話」（『新著月刊』

明治二〇年八月号）。『唾玉集』（春陽堂、明治三〇年八月）所収時改題「自作の由来」。引用は初刊に拠った。

<sup>13</sup> 露伴は注12の「作家苦心談」のなかで、大工の「倉」から谷中の五重塔の「講釈」もきき、「中々よく出来てゐると云ふことも合点」し、自らも相当調査した上で執筆したことを語っている。モデルとなつた谷中の五重塔

は、昭和三年に火災で消失し、今は跡に残る礎石と、モノクロの写真でしかその姿を偲ぶことはできない。故に、幼い頃に塔で遊んだ記憶があるという建築学者・藤島亥治郎が『五重塔』（東京・浅草寺発行、昭和四八年）に記した谷中の「天王寺（感應寺）五重塔」についての話は貴重な証言だろう。

たしかに、この塔は江戸後期の塔としては秀作であつた。実に良質の総樗造で、樗の味を残すつもりか、素木造りであることも他とは異なるが、それだけ材質にも自信があつたのであろう。非常にがっちりとした塔であつた。江戸の塔に似合わず各重の軒の出も思い切つて深かつたし、横幅が多かつたから、初重五メートル四五（十八尺）、総高三四メートル二一（二二尺八寸）の塔としては堂々たる落ちつきがあつた。（中略）寺で所蔵する三枚の棟札の中の二枚はこの塔の再建棟札で、その一枚には中央に「奉再建五層塔長耀山感應寺尊重教院」と書き、左右に「供養導師清雲院前大僧正実乘、開眼導師大仏頂院権僧正覚謙」、棟札の裏には「寛政三年（一七九一）亥冬十月二十三日、塔三間四面、高八丈五尺九寸、露盤上九輪高二七尺、中心柱十一丈幅二尺八寸、総高十一丈幅二尺八寸」と書いた上に、「大工近江州高島産八田清兵衛」とある。また、別の棟札は大工や職人たちの名を連ねたもので、「大工棟梁八田清兵衛、同清六、同助四郎」以下四十六人を連署しているのは珍らしく民主的である。結局棟梁は、のっそり十兵衛でない。

谷中の塔が十兵衛の夢に現れたのと同様の「素木造り」であつたこともさることながら、藤島が記憶するような、寺が所蔵する棟札に大工棟梁の名前が連署してあるという珍しい状況は、上人が十兵衛と源太の名前を連ね

た趣向を思わせる。

14 能登路雅子「フェリスの観覧車と鳳凰殿——一八九三年シカゴ博覧会に見る日米のナショナルリズム」、『現代アメリカ像の再構築——政治と文化の現代史』東京大学出版会、平成二年）

15 注14能登路論参照

16 注1拙論参照

17 注6の解説・補注3は、「十二の鷹」「八坂の塔」、「群鷺図額」などの作品は、会期中に工芸館から美術館に移された経緯があるために、「両方（注・美術館と工芸館）の記事で触れられているようである」と指摘している。

18 注6参照

19 注14能登路論参照

20 露伴に身近な人物で、最も美術の話題において注目される一人が日本美術復興を目指した岡倉天心だが、本論では新聞紙面との関わりに限定して論じたため、言及していない。東京美術学校校長だった天心はシカゴ万博でも指導的立場にいた人物であり、日本側が力を入れた建築・鳳凰殿に関わり、英文パンフレットも執筆している。

21 『古社寺保存法俗解』（京都・貝葉書院、明治三〇年）参照

### 参考文献

関龍博覧会記事協会編『関龍博覧会記事』（交詢社、明治二四年一〇月〜明治二六年八月）  
臨時博覧会事務局編『臨時博覧会事務局報告』（明治二八年五月）

「五重塔」の引用は初出に拠った（章番号等、初刊と異同がある場合は、適宜記している。）

\*本研究はJSPS 科研費（19K00290）の成果の一部である。